

# 大量出血後に低Na血症を契機に診断したAcute sheehan's syndromeの1例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒川, 真侑, 栗原, 康, 中野, 千春, 千菊, 智紀, 宮森, 美花, 小西, 菜普子, 瀬尾, 尚美, 福田, 恵梨子, 中井, 建策, 田原, 三枝, 羽室, 明洋, 三杵, 卓也, 中野, 朱美, 橘, 大介, 角, 俊幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00004051">http://hdl.handle.net/10271/00004051</a>

第 45 回日本女性栄養・代謝学会学術集会

<一般口演 4>

## 大量出血後に低 Na 血症を契機に診断した Acute sheehan's syndrome の 1 例

大阪市立大学医学部附属病院 産婦人科

黒川 真侑

栗原 康、中野 千春、千菊 智紀、宮森 美花、小西 菜普子、瀬尾 尚美、福田 恵梨子、中井 建策、田原 三枝、羽室 明洋、三枚 卓也、中野 朱美、橘 大介、角 俊幸

Sheehan 症候群は、分娩時大量出血による低血圧により汎下垂体機能低下を来す疾患で、分娩後 6 週間以内に発症したものを Acute sheehan's syndrome といい、発症は稀とされている。今回、分娩後 2 日で低 Na 血症を契機に診断し得た Sheehan 症候群の 1 例を経験した。

症例は、33 歳の経産婦で、近医にて妊娠 40 週 2 日に経膈分娩に至ったが、円蓋部にまで及ぶ頸管裂傷を認め、分娩時出血量が 2100ml であった。その後、外陰部血腫も認め、当院に搬送となった。来院時、血圧 60/40mmHg、脈拍 150/分(ショックインデックス 2.5)を呈し、血液検査では、Hb : 4.9g/dl、血小板 : 7.5 万/ $\mu$ l、フィブリノーゲン : 121mg/dl、PT : 15.5 秒、ATIII : 40%、FDP : 39.9 $\mu$ g/ml であり、産科 DIC スコア 10 点であった。出血性ショックおよび DIC の状態で、子宮内からの持続的な出血を認め、輸血及び子宮内圧迫を施行しても止血効果は乏しく、カテーテル治療にて子宮動脈塞栓術及び、閉鎖動脈・陰部動脈塞栓術を施行しました。術後に、子宮内からの止血は得られたが、外陰部血腫の著明な増大を認め、ドレナージ及び圧迫を行い止血が得られた。総出血量 12,700g で、輸血は RBC42 単位、FFP38 単位、PC80 単位であった。

分娩後 30 時間で、低 Na 血症を認め、生理食塩水の点滴による補正を行い、一旦は改善を認めたが、産後 2 日目の血液検査にて、ACTH : 11.3pg/ml、cortisol : 4.1 $\mu$ g/dl が共に正常下限を呈しており、産後 5 日目に再度低 Na 血症を来したことから、下垂体機能不全が疑われ、ステロイド治療が開始となった。産後 7 日目の MRI でも下垂体辺縁のみが造影され内部の造影効果を認めない hook-shaped enhancement を呈していたため、Sheehan 症候群と診断した。ステロイドおよび高張食塩水投与により低 Na 血症は改善し、内服薬へ変更可能となり、産後 12 日目に退院となった。

Sheehan 症候群の発症には、低 Na 血症からの意識障害や頭痛、嘔吐が契機になる事が多く、大量出血時に著明な低血圧を呈する産褥管理には、Acute Sheehan's syndrome の可能性も念頭に置いておく必要があると思われる。